

# 塊の団

シニアビジネス

第39回

村田アソシエイツ代表・東北大学特任教授 村田 裕之

## 米国学会で認められた 日本発の対認知症療法

東北大学・川島隆太教授と公文教育研究会との共同研究により開発され、認知症の改善に大きな実績を上げているのが「学習療法」である。これは薬物を使わずに症状の改善が図れる「非薬物療法」



スタッフ同士の「学習」風景

## 学習療法

# 薬を使わず、学びの力で 認知症を改善・予防する

の一つで、すでに全国1400カ所の高齢者施設や自治体施設でのべ1万7千人の方が取り組み、大きな成果を上げている。

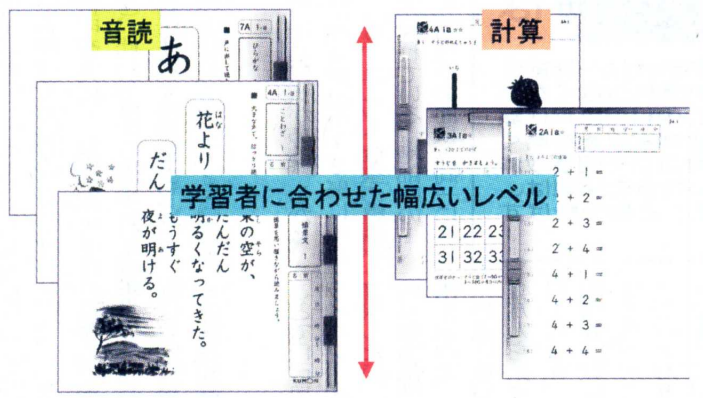
従来の非薬物療法の最大の問題点は、その療法が認知機能の改善に本当に有効であることの証拠となるデータが提出されていないことにある。これに対し、学習療法は、音読・手書き・簡単な計算が脳の前頭野を含む多くの部位を活性化するという科学的事実に基づいて開発され、症状改善に有効であることのデータが研究論文として提出されている。

この論文は05年の米国老年学会誌 (Journal of Gerontology) に掲載されている。通常この雑誌に掲載されるまで投稿後2年はかかると言われているが、この論文の場合1カ月で掲載通知が届いたとのこと。学習療法がいかに世界から注目されているかを示すものだ。

### 学びの力が脳機能と生きる意欲を回復させる

学習療法は原則2人の学習者と1人の支援者との組み合わせで実施する。この理由は、教材の学習だけでも脳機能改善効果がある

### 使用する教材の例



学習者に合わせた幅広いレベル

が、支援者が学習者と上手にコミュニケーションを取ること、さらに改善効果が得られるからだ。現状、日本や海外で多くの脳トレプログラムが存在するが、その多くはパソコンを活用する形態である。ところが、この形態だとパソコンを操作できない高齢者には敷居が高いだけでなく、画面を相手に一人で作業をしなければなら

わってもらうことも大切である。このコミュニケーションには多くの工夫が施されている。たとえば、学習が終わった段階で、その場で成果を認め、ほめることが大変重要である。また、認知症高齢者と言っても一人ひとり認知レベルが違っているので、必ず満点を取れるよう、その人のレベルに適した教材を選択し、学習における「達成感」を味わってもらうことも大切である。

ず、余程ソフトに興味をひかせ工夫がないと継続は難しい。これに対して学習療法では、学習者は支援者の顔を合わせたコミュニケーションを通じて楽しく実践することができ、ため、継続意欲も起きやすい。この点が他のプログラムと比較した学習療法の大きな違いである。

### 学習者だけでなく支援者も「学習」する

一方、改善するのは実は学習者だけではない。支援者であるスタッフの意識も変わってくる。高齢者施設での認知症患者の介護の現場では、一般に手厚く介護を行っても、改善の見込みがなく、介護スタッフはゴールの見えない徒労感に襲われることが多い。ところが、学習療法に取り組



学習療法風景

「やってみせ、言ってみせ、させてみて、誉めてやらねば人は動かじ」

これは、かつて連合艦隊司令長官山本五十六が言った有名な言葉である。「誉めること」が認知症高齢者の改善にも大きな効果があることが大変興味深い。真理とは、時代の変化とともに原点回帰して新たな形で存在し続けるのだ。

### 世界から注目を浴びる学習療法

この学習療法を海外で説明すると、例外なく驚きの声が上がります。特に認知症人口の多い米国、高齢化率の高い欧州で注目される。筆者らのグループは、昨年、米国の高齢者施設で説明会を開催したところ、入居者およびスタッフから大変な反響を得た。

社会の高齢化に伴い発生する個人の健康や老後の生活設計に関する課題には「世界共通」のものが多い。その一つが認知症である。日本発の対認知症療法が世界各国で役に立つならば、超高齢社会において日本が可能な新たな貢献のスタイルとなりうるだろう。